

### たばこの効用問う

東日本大震災の直後、品薄状態になった物資の一つにたばこがあった。被災地では、貴重品であったたばこを手にできた愛煙家の間で喜ばれたという。6月、たばこを愛する文化人らが中心になって「喫煙文化研究会」が発足したが、喫煙に対する世間の目が厳しさを増す中で「たばこの効用」に理解を求めていくという。非喫煙者と共存する道をどう探るのか。(日出間和貴、写真も)

### 得られる安らぎ

震災から1カ月が過ぎた頃、宮城県気仙沼市でかき養殖業を営む男性(36)は都内の知人を通じてたばこの支給を受けた。大津波が来るまではしばらく禁煙を続けていたが、「3・11」を機に喫煙が始まったという。

「毎日毎日、がれきの山を片付けている希望の見えない状況の中で、たばこでも吸っていないとやっていられなかった。たばこを吸いたくてたまらないというより、非日常から日常の生活に戻るためのきつかけとして、一本のたばこが必要でした」と振り返る。

酒やたばこは嗜好品にあたるため、被災地において水や食料などの生活物資のように配給されることはなかった。疲労度が増す避難所暮らしの中で、スモーカーはより一層、肩身の狭い日々を強いられた。

一方、この6月に発足した「喫煙文化研究会」。発起人にザ・タイガースの「花の首飾り」などで有名な作曲家、すぎやまこういちさん(80)がいる。喫煙歴60年、1日に1箱以上吸うヘビースモーカーだ。喫煙

に対して逆風が吹く中で、「喫煙バッシング」の流れに歯止めをかけたという。「被災地に酒とたばこを持っていった人の話では、この2つの嗜好品は現地でもかなり喜ばれたようだ。スモーカーは喫煙が健康に良くないことは百も承知。それでも、ふっと一服したときに得られる安らぎは何ものにも代えがたい。過度の飲酒が肝臓によくないはずなのに、同じ嗜好品でもたばこの危険ばかり強調されているような風潮を感じます」

### 禁煙ファシズム!?

禁煙・分煙の流れに逆行するような研究会だが、雑誌「愛煙家通信」(ワック)の刊行や運営するサイトで喫煙にまつわる情報を発信し、世論の支持を得たという。

「たばこを吸うことすら、後ろめたい時代の雰囲気がある」と嘆くすぎやまさんは「ニコチン依存症と長く闘ってきた米国のオバマ大統領が隠れてたばこを吸うシーンが公にされたことがあった。このままでは喫煙行為に罪悪感だけが植

「禁煙ファシズムのような社会の圧力を感じる」と話す「喫煙文化研究会」の発起人の一人の作曲家、すぎやまこういちさん



え付けられる。これでは、多勢に無勢のような(喫煙を擁護する言論や表現が封殺されているとする)「禁煙ファシズム」です」と語気を強める。同研究会では年内にも、たばこの健康被害を専門に

### 「喫煙者の目覚めを待つ」

NPO法人「日本禁煙学会」理事長で医師の作田学さんの話「われわれは喫煙者を敵視しているわけではない。人は行動の一貫性を重んじ、その行動を止めなければならぬと分かったとき、不都合な情報を入れないようにしたり、その情報は誤りであると信じようとする。たばこを吸う仲間内で集まり、『禁煙推進はファシズムだ』『たばこには効用だってある』『自分は肺がんにはならない』などとお互いをなぐさめ合っているようにしか見えない。喫煙者が目覚めるときを待っている」

## 「喫煙文化研究会」でバッシングにNO



禁煙への思いや喫煙履歴について文化人らがつづる『愛煙家通信』